



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	序文
Author(s)	西山, 徳明
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 1-2
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61155
Type	other
File Information	CATS9_01.pdf



序文

西山 徳明

北海道大学観光学高等研究センター長・教授

本書は、2015 年 9 月 19 日と 20 日に、北海道大学観光学高等研究センターおよび文教大学、立教大学の共催により開催された、第 4 回観光創造研究会「自然災害復興における観光創造」での研究発表および事例報告、議論を取りまとめたものです。震災復興における観光創造の重要性や役割、意義について検討するため、本センターの真板昭夫教授が全体の企画を担当し、東日本大震災のみならず、国内外の様々な災害地の事例を知る研究者や実務者に参集頂きました。そして 2 日間の活発な議論を通して大変有意義な成果を得ることができたため、その成果を一刻も早く世に問うべきと考え、本書の出版に至った次第です。

この観光創造研究会とは、観光学高等研究センターが主体となり、本センターが研究および教育の理念として標榜する「観光創造学」の体系化を目的に開催するもので、この体系化を通じて日本の観光研究のさらなる発展と優れた人材育成への貢献をめざしています。研究会は各回でテーマを定め、その分野の一線で活躍する研究者、実務者を全国から札幌へと招き、2013 年秋から 1 年に 2 回の頻度で開催しています。

自然の多様性に恵まれ、地域ごとに特徴ある文化を育んできた日本は、その一方で「災害大国」でもあり、これまでも自然災害が発生する度に自然環境や地域文化は多大な影響を受け、そこから復興してきました。本書におさめられている第 4 回の観光創造研究会では、自然災害からの復興に観光が重要な役割を果たしてきた国内外の事例を多角的に取り上げ、被災地ならびにその周辺地域に対して観光が果たしうる役割と可能性について検討がなされました。

まず 1 章の冒頭では、本研究会の企画者により、復興に観光が果たしうる役割と可能性およびその意義やあり方について論議したいとの趣旨説明が述べられています。2 章では問題提起として、風評被害の情報発信対応の重要さとブランディング論に何ができるかについて述べられています。そして 3 章では、これまでマスツーリズムを開発し支えてきた大手旅行事業者が蓄積したノウハウが、災害時にいかに貢献し得たかについての事例が報告されています。4 章では、震災後の岩手県における災害復興と観光の状況、とりわけエコツーリズムや「学ぶ観光」が展開した状況が報告され、続く 5 章ではその中でも特に「黒森神楽」を取り上げ、芸能による震災復興の重要性を提起する研究が報告されています。6 章では、福島県北塩原村の震災前後の観光の概況とエコツーリズムの展開状況が報告され、続く 7 章において、その北塩原村において発生した風評被害の精査にもとづく「災害弾力性」の概念を提示した研究成果が報告されています。8 章では、中国の自然災害地における研究事例に基づき、「負の遺産」が地元住民、観光客、地方政府および観光

企業など 4 つの主体による相互作用によって構築されとする研究成果が発表されています。9 章では、新潟県山古志村を事例とし、復興まちづくりは、災害、復興、観光がどのように関連して進むのか、また支援から交流への転換がいかに引き起こされるのかについて実証的な研究成果が発表されています。10 章には、地震による津波の常襲地であるハワイ島ヒロの町における都市計画を含む津波対策と太平洋津波博物館の活動を通じた津波教育について報告されています。11 章では、詳細なヒアリング調査に基づく、被災地における語り部ガイドの活動とその意義について報告がなされています。最後に 12 章として、以上の様々な事例報告や研究発表に対する、災害研究の権威である室崎氏による総合コメントを掲載し、さらに総括コメントとして石森氏より、Pro-Sufferer Tourism をキーワードとした「被災者のための観光」についての見解が述べられ、観光創造学の今後進むべき道が提案されています。

最後に、本書の編集にあたりご尽力頂いた観光学高等研究センタースタッフの赤沼友美氏、教員スタッフである山村高淑氏、田代亜紀子氏、八百板季穂氏、石黒侑介氏、村上佳代氏に心より感謝をいたします。

本書に記された成果が、自然災害復興に取り組まれている様々な関係者や住民の方々、また様々な復興段階の地域に届き、少しでもお役に立ちますことを、北海道の地より祈念しております。